

2022年5月22日佐土原キリスト教会聖日礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書7章14～23節

説教題：人を汚すもの、聖く生かすもの

こんな話を読みました。北米の話です。「ある人が屋台に一個50セントのベーグル(硬いパン)を売っていました。その前を、毎日ジョギングをして通る人がいました。彼は50セントを金入れの容器に放り込んで行きます。けれどもベーグルは取らずに走り去るのです。ある日、走り去ろうとするその人を、ベーグル売りが引き止めました。ジョギングしている人が『なぜ、お金を投げ入れるのにベーグルを持って行かないのか、尋ねたいのかい?』と聞くと、ベーグル売りは答えました。『いや、ベーグルは60セントに値上げした、と言いたかったんだ』。「強欲」な感じがしますが、文章はこう続いています。「クリスチャンも神に対して同じような態度を取りがちです。神が下さったものに感謝しないばかりか、もっと多くを求めます」。

私達の生活の中にも「神様からの50セント」が沢山あるのではないのでしょうか。ある時、教会で1枚の紙を見つけました。こんな言葉がありました。「もし冷蔵庫に食料があり、着る服があり、頭の上に屋根があり、寝る場所があるなら、あなたは、世界の75%の人達より恵まれています。「他の人と比べて恵まれているから…」という訳ではないのですが、確かに私達にも色々な問題がありますが、それでも感謝すべきことに囲まれているのではないかと思います。(特に今、不条理な戦争を見せられ、平和の中で暮らせることの有り難さを痛感することです)。それにも拘らず、『ベーグル売り』になっているな」と自分を振り返って思われます。ビリー・グラハムは「感謝の心を持たないことは罪です」と言いました。聖書は教えます。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」(1テサロニケ5:16~18)。「感謝する」ということは、「私達がどのように成長して行けば良いのか」ということに関わる大切なことのように感じます。

今日は、前回の続きです。「内容」と「適応」に分けてお話しします。

1: 内容…何が人を汚すのか

14節に「イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた」(14)とあります。わざわざ群衆を呼び寄せて語られる。それだけ大切なことを語られるのです。何を語られるのか。実はこの前の箇所でパリサイ人や律法学者達が「イエスの弟子達が食前に手を洗わなかった」と言ってイエス様を咎め、「食事の前に手を洗わないことは身を汚す」と言って非難しています。「手を洗う」と言っても衛生的な意味ではない、宗教儀式的な「手洗い」です。「洗い方」がありました。「両手の指先を上げて上から水を手首に達するまで注ぐ。そしてお互いの手を、こぶしをこすりつけて洗う。次に指先を下に向けて水を注ぎ…」とあるそうです。彼らにとっては、それが「汚れ」から身を守ることであり、「神を信じる者」の当然あるべき姿だったのです。

この箇所は、その続きの箇所になります。それに応えて、イエス様のポイントは、「何が人を汚すのか」ということです。言い換えれば「聖められるとは、聖く生きるとは、どういうことか」ということです。

なぜ、ここで食べ物のお話が出て来るかというと、「手を洗って食べる」ことに関連してですが、さらに「汚れ」に関連して、ユダヤ教には食べ物に「食べて良いもの」と「食べてはいけない汚れたもの—(人を汚すもの)」の区別があったのです。詳しくは「レビ記11章」や「申命記14章」にありますが、ある本に簡単にこうまとめてありました。「反芻する、ひづめの分かれている動物は食べてよいし、魚類については、ひれとうろこを持つものは良い…その結果、ウシ、ヒツジ、タイ、サケ、コイなどは良いが、ブタ、ウマ、イカ、タコ、アナゴ、シャコ等はダメ…寿司屋に入っても寂しいメニューになりそう…ユダヤ教徒は現代でもこれも守っている」(千代崎秀雄)。「何でこんなものがあるのか」と私達は思います。ある神学者が次のように説明しています。「ある動物を食べることが

禁じられたのには主に 3 つの理由による…①ある動物は砂漠気候特有の病気を保持していた。②ある動物は食用に飼育するようなことになればおよそ経済的に馬鹿げていると言って良いほどの贅品だった。③ある動物はイスラエルが真似をしてはいけない異教の宗教に犠牲として好まれていた」(D スチュワート)。さらに加えて説明します。「医学的な研究によれば、禁じられている多くの動物は人々にアレルギーを与えるものであった。食物規定はイスラエルをアレルギーから守るためのものであっただろう。なおイスラエルが最も良く食べたラム肉は、全ての肉の中で最もアレルギーの少ないものである」(D スチュワート)。元々は「良きもの」として作られた法だったのでしょう。{ついでにご紹介しますが、その学者は「旧約律法の中で『新約聖書』の中に明らかに更新されているもの—(継続して教えられているもの)—以外の律法にクリスチャンは縛られる必要はない」(D スチュワート)と教えます。「新約聖書」には食物規定はありません。いや 19 節には「イエスは、このように、すべての食物をきよいとされた」(19)とあります。だから私達は、何でも食べて良いのです。感謝なことですよ。

話を戻します。ユダヤ教には、食物規定だけでなく、身を汚すことになる事柄がその他にも色々教えられていました。動物—(人間も含めて)—の死骸に触れること等もそうです。それらも、当時の社会では何らかの意味があったのだと思います。しかし、やがてその律法の規定を基に、事細かに「汚れないようにする方法、汚れから身を聖める方法」、そのようなものが作り出されて行ったのです。「手洗い」もその 1 つでした。しかし、「汚れ」とか、「汚れから身を守る—(聖める)」という考え方は、ユダヤ教に限ったことではありません。日本でも「お祓い」というようなことをします。

「祓い給え、清め給え…」という祈りの言葉があります。しかし、ユダヤ教にしる他の諸宗教にしる、「汚れ—(汚れからの聖め)」についての問題は「汚れは外からやって来る」と考えることです。「神の前に自分の身が汚れる、神に近づけない者になる」、それは外からやって来るものがそのようにする、と考えている。だから「外のものから身を聖める、身を洗う、汚れを祓う」という発想になるのだと思います。

しかし、イエス様は「そうではない」と言われます。(18~19 節)「…外側から人にはいつて来る物は人を汚すことができない、ということがわからないのですか。そのような物は、人の心には、入らないで、腹に入り、そして、かわやに出されてしまうのです」(18~19)。「神の前に身が汚れる、神に喜ばれない者になる」、それは外からやって来るのか。イエス様は「外からの食べ物があなたを汚すことはない、人は外から来るもので汚されることはない」と言われるのです。

しかし問題は、では「外から来るものであなたが汚されることはない」と言うことは、「だから、あなた方は皆、聖いのだ」と言っておられるのかということ「決してそうではない」のです。「そうではない」どころか、もっと深刻なことを語られます。20~23 節「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、食欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです」(20~23)。イエス様は「外から来るものではなく、自分の心から出て来るものがその人を汚す」と言われるのです。ここに書かれている 13 の悪徳を 1 つ 1 つ説明することはしませんが、私達に一番身近なのは「ねたみ」ではないでしょうか。牧師会に行きます。お互いに近況報告をします。「うちの教会でこんな祝福がありました」という話を聞きます。「良かったな、神様は生きておられるな」と思う気持ちもあります。励まされる思いもあります。しかし、同時に妬む気持ちが確かに頭をもたげのを感じるのです。自分でも醜いと思うのですが、湧いて来るものはどうしようもない。なぜ純粋に喜べないのか、と本当に思います。ちなみに、星野富弘さんがこんな詩を書いています。「私もあの犯人と同じことを考えたことがある。それがどんなに悪いことか、今、あの人が教えてくれた」(星野富弘)。もちろん 13 項目全部が全部ではないでしょうが、星野さんも言っておられるように、私達も「私の心の中には、こんな思いはない」とは言えない、何かしら覚えのあることです。もちろん人間のレベルでは、同じことを思っても「実際に行動

するか、しないか」では大きな違いです。しかしどんな行動でも、根底に心情がある。だからイエス様も「悪い考え」(21)を先頭に持って来ておられます。その心情が行動に出るのです。ここに墨の入ったコップがあるとします。そのコップを私が倒します。この辺りが墨で汚れます。だれのせいでしょうか。私のせいでしょうか。もちろんそうです。しかし、もともとコップの中に墨が入っていたのです。その墨が倒れた拍子に表に現れて汚したのです。心がないことは外にも出ない。しかも「人が見るようには見ない…人はうわべを見るが、主は心を見る」(1サムエル 16:7)と言われる神の目の前には、私達の心にあるそのようなものが神様を悲しませている、私達を汚しているのです。ですからイエス様は、この言葉を通して「あなた方は皆、神の前に汚れているのだ(よ)」と言っておられるのです。

私の中に私を汚すものがあるのです。私を神の前に喜ばれない者にする、色々な関係を傷つけてしまうもの、いやその前に自分の生き方さえ傷つけてしまうもの、そういうものが私達の中にあるのです。外側の問題ではない。何かのせいで、誰かのせいで、私が汚れてしまうのではないのです。私達自身の問題なのです。

2: 適用…どのようにして聖く生きられるのか

この箇所は、重大な問題を指摘して終わります。「では、私達はどうすれば良いのか、どうすれば聖く生きられるのか」ということを「適用」として考えたいと思います。

私達の内側から悪いものが出て来るのであれば、内側ばかりを見つめていても何ともならないのです。神学校時代の友人は、信仰を持つ前、自分の罪に苦しんで、「聖くなりたい」と思って、1年間、毎朝水をかぶって心を聖くしようとしたそうです。でも「1年が経っても、心の中は何も変わらなかった」と言いました。こんな話も読みました。ある方の御祖父様は、警察官をしながら、ある宗教の働き人でもありました。色々な行事の度にあちこちに呼ばれて行って「清め給え、祓い給え」と「お祓い」をしておられたそうです。しかし家庭では、妻をなじり、近親者をなじり…。孫であるその方は、その姿を見ていて「自分の罪を清めることはできないのだな」と思ったそうです。私達には自分で自分を聖めることは出来ません。内側から何ともならなければ、外側からやって来る力に頼るしかない。神がして下さることを期待し、待ち望むしかないのです。ヨハネは言いました。「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます」(1ヨハネ 1:9)。私達がすることは、まず正直に自分の現実(心の思い)を神に告白することです。そうして神に赦しを求め、神に聖めて頂くことを願うことです。

神様は、どうやって私達を聖めて下さるのでしょうか。ミカ・バンザゴという人の話を聞きました。ミカ・バンザゴは泥棒でした。手当たり次第の盗みをしました。家族からも友人からも盗みしました。刑務所に入れられたら、囚人仲間や看守からも盗みをしました。とうとう刑務所では、古代の法に則ってバンザゴの腕を1本切り落としました。その刑罰によって釈放され、彼は遠い土地に行って「もう盗みはするまい」と心に誓いました。しかし、とうとうある日、ある役人の家に忍び込んで逮捕されました。投獄された次の日、看守に呼び出されて「もしお前が囚人仲間や看守から盗みを働いたら、もう1本の腕も切り落とすぞ」と言われました。震え上がった彼は、しばらくは盗みたい衝動を抑えてじっとしていました。しかし、とうとう盗みを働いてしまいます。そして残っていた腕も切り落とされてしまいました。その刑罰によって釈放されました。それで盗みを止めたのか。いや、手で盗むことが出来ない彼は、口を使って盗みをしました。しかし、盗まないでおれない彼の罪の性質が、ついに変えられる日が来ました。彼は知人に誘われて教会に行き、そこでイエス・キリストの救いのメッセージを聞いたのです。「イエス・キリストの十字架の血、その血によって私達の罪が赦され、イエス・キリストを信じるならば、その人は救われて新しく造りかえられる」。説教者は最後に言いました。「今イエス・キリストを信じて新しい人生に入りたいと思う人は手を挙げて教えて下さい」。ミカ・バンザゴは、自分を変えてもらいたいと思いましたが、挙げるべき手があ

りません。しかし彼は、大勢の人々を肩でかき分けながら前に出て行って「私はイエス・キリストを信じたいのです」と告白して、ついにイエス・キリストを信じて救いに導かれました。その時から、彼は変えられ始めたのだそうです。

イエス様に祈り求める者は、イエス様が私達の心を、罪の支配から、神に支配へと植え替えて下さり、神の慈しみによって、何より聖霊の働きによって、御心に適う根を張ることが出来るようにして下さるのです。私達を少しずつ変える、という方法で聖くして下さるのです。それを信じて、イエス様に祈り求めて行きたいと願うことです。

そしてそのためには、祈りと共に神の言葉に魂を耕してもらうことが大切です。ある学者は言いました。「神の民、また神の子とは、神の言葉によって生かされる者のことだ」。「汚れを祓う」とか「身を汚さないようにする」というようなことではなくて、より積極的に「御言葉に生きる」、それが「聖く生きる」ということではないでしょうか。ある時、1人の姉妹の闘病中の話を伺いました。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」(1テサロニケ 5:16~18)、この御言葉がその方の愛唱句だったそうです。だから病床でも「これまでの恵みを感謝します、この状況も感謝させて下さい」と祈っておられたそうです。御言葉に生きられたのです。それが最後の日々、その方の生き方を聖くした—(その方を聖く生かした)—のではないかと感じました。また私は「聖霊の働きによって変えられる」と言いましたが、「聖霊は御言葉と共に働く」とも言われます。御言葉に捕らえられることを願って聖書を読み続けることが大切です。「心に働いて下さる聖霊の働き」を願い求め、御言葉に生きたいと思うことです。そうやって私達は、少しずつ聖く生きて行くことが出来るのです。

3: 終わりに

初めに「感謝は信仰生活の重大事である」という話をしました。それは、「聖く生かされる」ということにも関係があると思います。シスターの渡辺和子さんが、こんなことを書いています。まだトースターがなかった時代、修道院では朝食のパンをオーブンで焼いたそうですが、時々、パンが黒焦げになりました。しかし、もったいないので、それも大皿に盛って食堂で出しました。修道士は、上から1枚ずつ取って行きます。ある修道士は、「また黒焦げか」と不機嫌な顔をして次の人に皿を回しました。次の修道士も、黒焦げのパンを取りましたが、裏返しにして「片側だけで良かった、ありがたかった」と言ったそうです。渡辺さんは「不機嫌は環境破壊だ」と言っておられますが、感謝を忘れないことも、私達を聖く生かすポイントではないでしょうか。だから聖書は「すべての事について、感謝しなさい…」(1テサロニケ 5:18)と教えるのかも知れません。